



東京都渋谷区代々木2丁目23番1号
ニューステイトメナー865号室 (〒151-0053)
Tel 03-6240-2300 Fax 03-6240-2301
WEB : <http://www.asset-adv.co.jp/>
E-mail : info@asset-adv.co.jp



AA 通信

2008年(平成20年)3月1日 第7号

☆☆☆ 通信トピックス ☆☆☆

【変革を迫られる日本】

～ ジャーナリスト “櫻井よしこ”さんの講演を聴きました。～

宅建協会の研修会で櫻井よしこさんの講演を聴きました。“変革を迫られる日本”と題し、日本に大きな影響を及ぼす国である、“アメリカ”と“中国”を取り上げ、対日本政策転換の状況について話をして下さいました。

3年後に“今”を振り返ると、あの時が日本の大きな転機であったらうと感じる事が出来ると思うので、現在の日本と世界情勢をよく観ておくように、と言って話を始めました。

最初に“中国”の対日政策について、皆様も、福田首相と温家宝(おんかほう)首相とが、笑顔で会談し、キャッチボールまでした様子をニュースでご覧になったと思いますが、小泉首相時代と違って、中国が日本に微笑み外交を展開しています。福田首相が就任当初から「靖国神社へは参拝しない」と明言したからでは無い、と櫻井さんは言います。在任中に靖国神社を参拝しないと明言しなかった安部首相の時代も日中首脳会談が再開されていました。

では、理由は何でしょうか？

現在の胡錦濤(こきんとう)国家主席の前任である、江沢民(こうたくみん)氏が国家主席であった時代は、大変厳しい反日政策がなされていました。しかし、あまりの厳しさに中国に進出した企業の約30%が撤退してしまいました。日本の資本と技術とが中国に進出しなくなった事が、理由の一つだそうです。このままでは、中国が豊かになる事が出来ません。

もう一つの理由が、アメリカと北朝鮮との距離が急速に縮まっている事だそうです。アメリカのブッシュ大統領は、北朝鮮を「悪の枢軸」とまで言っていました。ところが現在は、既にテロ支援国家の指定を解除する旨さえ示唆しています。

北朝鮮の金正日(キム・ジョンイル)はアメリカと親密になる事を望んでいる旨の手紙を、「核を放棄しても構わない。」との言葉を添えて出したそうです。それに対してアメリカは、中国の胡錦濤国家主席を介して「平和協定を締結する用意がある。」と返事を

しています。この手紙を見た中国は、どう思ったのでしょうか？

中国の喉仏に位置する北朝鮮がアメリカと親密になる。最悪は軍事拠点が置かれる事も考えたと思います。

では逆に、なぜアメリカは北朝鮮と親しくなる必要があるのでしょうか？それは、台湾に変わる軍事拠点を必要としているからだと言います。アメリカは民主主義国家である台湾に対して、非公式ではありますが友好的な態度を示して来ました。一昨年には、中国を仮想敵国と想定し、台湾保護とも受け取れる日米合同軍事訓練を実施しました。ところが、実際は、日中共同声明調印の前年、1971年に、ニクソン大統領訪中のお膳立てで訪中した、大統領補佐官のキッシンジャー氏が、当時の周恩来(しゅうおんらい)首相に対して「台湾はいずれ中国に戻る。」と話しているそうです。最近では、コンドリーザ・ライス国務長官も、台湾名義での国連参加の住民投票について「われわれは『1つの中国』政策を堅持し、台湾の独立を支持しない。」と、反対する旨の発言をしています。

アメリカは台湾がいずれ中国に戻ると考えており、台湾に変わる拠点として、北朝鮮を考えている。こう考える事は中国にとっては簡単です。そう考えた中国は日本と近づく必要があるのです。対面する敵国の背後の国と友好関係を保つ事は、戦略の基本です。

次に“アメリカ”の対日政策について、昨年11月16日に福田首相は訪米をしています。その直前11月7日に訪米したフランスのサルコジ大統領は、ワシントン初代米大統領ゆかりの地であるバージニア州マウントバーノンの旧邸宅に招かれ会談をしました。続く9日には、ドイツのメルケル首相が、テキサス・クロフォードにあるブッシュ大統領の牧場に招かれ会談をしました。

ブッシュ大統領の両国との会談の主題は、イランの核開発問題です。国連安全保障理事会の決議に反してウラン濃縮を続けるイランにどう対処すべきか、長時間に亘ってこれらを議論したとされています。

しかし、その後訪米した日本の福田首相との会談は、ホワイトハウスで、たったの一時間でした。通訳を介してどの程度の話ができたでしょうか？さすがの福田首相も、自分が冷遇された事は感じたようです。

江沢民が国家主席の時代に、21世紀の中日関係に関するレポートがあるそうです。その書には、「21世紀の“日本”は、政治大国にはならない、しかし日本には富と技術がある。それらを中国に差し出させる為に、日本をコントロールしなければならない。その方法は二つ、一つはアメリカからこれを言わせる事。もう一つは日本の国柄を利用する事である。日本は押せば引く、叩けば蹲(うずくま)る国である。当面、利用すべきは歴史問題が最良である。」ここまで言われている様です。

さて、当の“日本”の国家は、何をどこまで理解しているのでしょうか？

「日本の国家が機能していない」と、櫻井さんは言いました。「戦略無き国家のままでは“日本”が衰退する。」と警鐘を鳴らします。

本来、“日本”は外交力が長けた国でした。アジアの歴史上“日本”という小さな島国が、現在でも独立した“国”であるという事は稀有なケースであり、それは有能な外交力があったからだ、と、櫻井さんは以下の有名な話をして下さいました。

聖徳太子は、遣隋使である小野妹子に託して、隋の煬帝(ようだい)に国書を出します。「日の出る処の天子より、書を日の没する処の天子に致す。恙(つつが)無きや…」煬帝はこの対等外交の手紙に、烈火のごとく怒りました。しかし、当時の隋は高句麗遠征を控えており、敵の背後である国と手を結ぶ事が得策であると判断します。これに対し、次に出した国書には、“天子”という表現を使わず、新しい表現で、「東の国の“天皇”より敬いて西の国の皇帝へ白す、恙無きや…」、文書一つで素晴らしい外交です。

こうした歴史を踏まえ、“日本”が、戦略的外交を通して、その存在を強く示して貰いたいと感じました。日本を取り巻く世界情勢について、解り易い講演を聴く事が出来ました。